

えほんたいこうき

絵本太功記

〔解説〕

寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十（たいじゅう）」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

〔あらすじ〕

主君尾田春長の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。

〈妙心寺の段〉光秀の母さつきは、主君を討った光秀に立腹しており、家臣の四王天田島頭や光秀の妻操の願いも入れず、一人尼ヶ崎に転居してしまいます。光秀は母の心に感じ自刃しようしますが、四王天と息子十次郎

に諫められ、改めて天下取りの戦へと向かいます。

へ夕顔棚の段へ尼ヶ崎のさつきの閑居へ、光秀の妻操と息子十次郎の許婚初菊が訪ねてきます。そこへ旅の僧に身をやつした久吉が一夜の宿を乞うのでした。出陣の挨拶に訪れた十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。へ尼ヶ崎の段へ最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を真柴久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。敗戦の様子を告げに戻ってきた十次郎は深傷に息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのでした。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

妙心寺の段

さても逆賊武智光秀、多年の恨み一戦に、春長父子を討ち奉り、妙心寺に砦を構へ、勝ちほこつたる諸軍の勢ひ、ともに威風を現はして、備へ厳しく守りゐる。武智十兵衛光秀、武威轟かす強将の、常にかはりし屈托顔、席を改め詞を正し

「ホ、三人とも出迎ひ大儀。シテ母人には御機嫌よくお渡りなさるか」

「サイナ、先程も田島頭と自らが、わつつ口説いつ、どうやらかうやらお口が和らぎ、母公様とも睦じう」

「ム、ホそれは重畳出かいた〜。さあらば直ぐさま御対面」

「イ、ヤ、それには及ばぬ、母が直々参らん」と、声うちかけを引きかへて、木綿布子に風呂敷包み、背にちよつこり賤しずの女の姿見るより驚く人々、操は傍にすり寄つて

「系図正しき武智の御家、ことさら四海の武将とも仰がれ給ふ夫光秀。天下の御母公様ともいはるゝ御身が、浅ましきお姿はもしやお心違たがひしか」と、尋ねににっこり打ち笑ひ

「ホ、忝くも清和源氏の嫡流たる武智の系図。元より武勇の家柄なれば、誰に恥づべきいはれなし。年は寄れども心は鉄石。渴しても盗泉の水を吞まずとは、お身たちもよう知つてゐやる筈。心穢れたわが子の傍、片時へんしも座を同じうせんはわが日本の神明へ、恐れあり〜。伯夷叔斉を習ひたゞ雲

水に従ふて出で行く母。これがこの世の別れぞ」と、義強き母も恩愛の涙紛らすありさまは、いと哀れぞ増さりける。光秀は黙然と、さし俯ひてゐたりしが操の方は涙ながら

「コレ申しわが夫。母様のたゞお一人、いづくを当てと長の旅。なぜお留めなされませぬぞ」

「ホ、不忠不孝との御さげしみ、いまさら申す詫もなく、せめては母のお心に逆らはぬが寸志の孝。

四海の内はこの光秀がたなこころ掌にある。お留め申すな、そのまゝ〜」

「ヲ、さすがは悪人程あつて根強い魂。チエ、いはん方なき人外にんがいめ」

と、睨む目元にはら〜と、涙かくして立ち出づる心の張弓強弓つよゆみの引きぞ煩ふ嫁孫の中に悲しき

初菊が

「これなう申し祖母ばば様」

と控へる手先振り払ひ、見返りもせず出でて行く『わっ』と泣き出す人々を制し留めて

「ヤア〜者ども。母人の御行方いづくまでも見届けよ。御手道具の用意〜」

と光秀が、鶴のひと声あまたの軍卒、箆筒長持ながもち挟箱はさみばこ、その外雑具ぞうぐ鋌乗物

「御母公様のお姿を、見失ふな」

と足早に、後を、慕ふて急ぎ行く。影見送りて光秀は、なにか心に打ちうなづき

「奥操せがれ、倅せがれ十次郎、嫁初菊もろとも次へ立ちやれ。用事あらば手を鳴らす」

と、心ありげな詞の端

「アイ」

とは言へど立ち兼ねる

「ヤアぐづぐづとなにを猶予。早く立てよ」

ときめつけられ心は後に残れども親子三人打ち連れて、是非なく、次へ入相しりあいの鐘が無常を告げ渡る、げにももの凄き庭の面忍おもび出でたる四王天『君の様子はいかゞぞ』と、身をひそめてぞ窺ひゐる。それとは知らぬ光秀が、あり合ふ硯すずり引き寄せて、筆喰ひしめし唐紙の、表になにやらさらさらかくと見るより、十次郎瞬きもせず物蔭かげに、守りゐるとも白書院、たゞ一心に書き認したため筆投げ捨てゝむんずと坐し、諸肌くつろげ指添さしぞえを、抜くや玉散る氷の刃、やゝ打ち眺め両眼に、はらゝ涙喰ひしばり、既にかうよと見えければ主従小蔭を

走り出で

「ヤレ、早まり給ふな父上」

と、取りつく十次郎、四王天、鏡のごとき両眼を、くわつと見開き声震はし

「コレわが君。コリヤこなた狂気召されたの。今こん

朝ちようより始終の様子、心得がたく思ふゆゑ、万事

心をつくる某それがし。物蔭より窺へば、出かし顔に辞

世の一句、『順逆二門なし。大道心源に徹す。五

十五年の夢覚め来たつて、一元に帰す』とは

ナ、ゝゝゝ、なんの癡言たわごと。君、臣を見ること塵芥

のごとくせば、臣、君を見ること怨敵おんてきのごとしと、

春長猛威に増長して、神社仏閣を焼失し、万民の

苦しむる暴悪、神明これを誅するに、光秀の御手

をもつて討たし給ふ。天の与ふるを取らざれば、

災ひその身に帰す。さほどのことを申さずとも、よく御合点のこなた様、切腹とは馬鹿くしい。人は知らず、この四王天田島頭、殺すこと罷りならぬ」

と居丈高

「ヲ、さうぢやく。父の命はわれく始め万卒に至るまで、御一身に及ぶ御命。臣義を守るとも、君これを補助せざるは、それ将とは申されず。

たゞ生害はとゞまり給ひ、下万民の苦しみを救ひ給へ」

と右左、涙とともに諫めの詞光秀はたと横手を打ち

「ハ、誤ったりく。一天の君の御為には、惜しからざりしこの命、暫しはながらへことを計らん。

まづは緇旨りんじを乞ひ受けて、なほも背かん者どもを悉く誅戮せん。急ぎこれよりわれは参内さんだい。汝ら二人は久吉が、都へ登るを半途に待ち受け、たゞ一戦にぼつ返せよ。イデ装束を」

と立ち上がれば近習きんじゆ小姓が心得て運ぶ大紋立鳥帽子ぼし立派に着なす骨柄はあたり輝くそのよそほひはや引き出だす栗毛の駒光秀ゆらりと打ち乗つて

「ヤアく十次郎。田島頭もろともに西国へ馳せ向かひ、必ずともに油断なく軍功を現はせよ」

と、詞に『はっ』と四王天

「ハ、ハ、ハ、君、御出陣には及ばずとも、某それがしかの地に向かひなば、猿冠かじや者めが素頭すこうべを、討ち取る
は手裏にあり」

「ア、イヤ、彼もしれ者。定めて遠き計略あらん」

「コハ親人の詞とも覺えず。父に代はつて某が、軍配取つて一戦に、敵の首を実検に備へんコレ、コレ、気づかひあるな」

と、勇み進みしわが子の骨柄

「ホ、あっぱれ、潔し。われも後より出陣」

と、手綱かいくりしと、乗り出す駿足馬

上の達者、轡の音は秋の野の、虫にはあらでりん

くく

「綸旨をやがて頭こころに戴き、刃向かふ奴ばら打ち立て、追ひ立て切り散らし、追っつけ四海に羽を伸さん。いそふれやつ」

と一散に、大内山へと急ぎ行く。

夕顔棚の段

御法の声も媚きし尼ヶ崎の片ほとり。誰が住む家と夕顔も、おのがまゝなる軒の棲。あたり近所の百姓ども、茶碗片手に高咄し。

「ノウ婆様、こな様も見たところが、上方で歴々のお衆さうなが、なんのために面白うもないこの在所へはござつたぞいの」

「ア、コレ、甚作、そりや言やんな。京の町は武智という悪人が、春長様を殺して大騒動。大方また下へ下つてゐやしやる久吉殿が戻つて来て、武智と是非に一合戦なけりや済まぬわいなう」

「ホウそんなら年寄りほうかく、京の町にはゐられぬ。とかく危なげのないやうにこんな在所へ

来てゐるが、大出来く。時に近づきがてら妙見講を勤めるとはよい手廻し、大きな馳走に逢ひました。これから随分お心安ういたませう、サアくくいなう」

と口々に、言ひたい事をたくしかけ、喋り廻つて歸りける。老母はつどつど門送り、庭の千草に打つ水も、保つ葉ごとに風かをる。軒を目当てに来る人は、武智が閨に咲く花の、操の前は家来を遠ざけ、嫁の初菊伴うて、窺ふ切戸の庭先に、花に心を養う老女。それと見るより手をつかへ、

「後室様の見舞ひとして、たゞ今参上いたせし」と慇懃に相述ぶる、詞に老女は打笑み、

「ヲ、珍らしい嫁女、孫嫁。遙々の道、ようこそく。さりながら倅光秀、当月二日本能寺にて、

主君を害せし無法者、同じ館に膝並ぶるも、先祖の恥辱身の穢れと、館を捨て、この在所へ、身退きしこの婆を、見舞ひとはをこがましい。善にもせよ悪にもせよ、夫につくが女の道、操の前は武智十兵衛光秀が妻、そなたはまた十次郎光義が嫁でないか。生死分らぬ戦場へ、赴く夫を打捨て、浮世を捨てた姑に、孝行尽すは道が違ふ。妻城に留つて、留守を守るが肝要ぞや。モウ寡婦暮しの楽しみに、夕顔棚の下涼み、捨つべきものは弓矢ぞ」

と、言ひ放したる老女の一徹、後は詞もなかりけり。常の氣質と逆はず、

「いかさま後室様の仰つしやるとほり、この様にたゞお一人ござつたら、何もかも気散じで、マア

第一はお身の養生。今から私も初菊も、後室様のお傍にゐて、飯も焚いたり茶も沸かし、お宮仕へをせうぞいの」

と、あり合ふ前垂打掛の、上に引き締め茶釜の傍、花香の籠もる姑の、洪々機嫌を取兼ねぬ。娘心に初菊も、マどう済むことか濁り井の、深き奇縁の釣瓶縄、『水汲み上げん』と立寄れば。

「コレく嫁たち。シテ孫十次郎は城に残つてゐめさるか」

「さればでござります。十次郎が願ひには、『どうぞ今日の軍に、高名手柄が現はしたいと、父上までは願ひしかど、婆様のお赦しなきに出陣するも本意でなし。母に取次ぎしてくれ』と、くれぐれの願ひゆゑあまり健気さ、祖母様に御機嫌の程

いかゞぞと、窺ひに参りました」

と語るうち、老母は涙をはらくと流し、

「フ、うるさの嫁が物語り。主を討つたる逆賊の邪非道の軍の評定、聞くが厭さのこの住居。ガまた孫を誉めるではなけれども、非道な倅光秀が子に、十次郎といふ武士が、生れて来るとはこれも因縁、悔んで返らず。戦場のこと聞きたうない。アイやく情けなの浮世や」

と、無量の思ひ百人の数珠爪繰つてゐたりけり。折ふし表へ草鞋がけ、風呂敷背にいつきせき、蛙飛込む道野辺の、清水結ばん夏の旅、西行もどきの僧一人、門口に立休らひ。

「諸国修行の一人旅。近頃申し兼ねたれど、お宿の報謝に預りたし。押しつけながら」

と言ひ入るる、声を老母が聞き取つて、

「見苦しうござりますれど、お心置きなう御一宿」

「それは千万忝ない。さやうならば御遠慮なしに、

御免々々」

とあがり口、腰打ちかくれば二人の女、草鞋の紐を解きかかれば

「ア、勿体ないく、構うて下さりませぬ。旅しつけた坊主の気散じ、木納屋の隅でもついころり。

蚊帳も蒲団も入りませぬ。お心遣ひ御無用」

と、詞なかばへ表口、人目を忍びたゞ一騎、窺ひ

立聞く武智光秀、『心得がたき旅僧』と、生垣押

分け差覗き、思はず見合す母の顔、老母は何か心

にうなづき、

「ア、わしとしたことが心のつかぬ、コレ御出

家様、この板囲ひがすなはち風呂場、水は幸ひ汲

んであり、ついばやくと燃して、暑い時分ぢや

行水して休んで下さりませ。婆も後で相伴しませ

う」

「ア、イヤそれには及びませぬど、相伴とあれば沸しませう。そんなら御免なされませ」

と、包み引下げ気散じに、湯殿をさして入りにける。味方の軍卒両手をつき、

「御子息十次郎光義様。『後室様に御願ひの筋あり』と、只今これへ御越し」

と言ふ間ほどなくしづくくと、家来に持せし鎧櫃

舁き入れさせて打ち通り、

「コリヤく子ども、そちたちに用事はない。陣

所へ早く」

と追つ立てやり、威儀を正して両手をつき、

「母様を以て御願ひ申せし出陣、御聞き届け下されなば、武士の本意」

と十次郎、思ひ込んでぞ願ひける。老母は見るより機嫌顔、

「才、珍らしい十次郎、出陣の願ひとな。倅を見限りこの所へ身退きしに丁寧な願ひの筋。最前嫁女に詳しく聞きました。とても出陣しやるなら、祖母が願ひはこの初菊、今宵この家で祝言の盃してから門出しや。なんと嫁女嬉しいか」

と、老ひの詞に初菊は飛立つばかり気もいそぐ、心の悦び穂に出づる、顔は上気の夏楓、色も媚くばかりなり。たゞ黙然と十次郎、『今日初陣に討死と、覚悟極めしこの体。お暇乞ひに参りしと、

知らせ給はぬ悲しや』と、涙吞込み忍び泣き。操の事も立上がり、

「祖母様の御機嫌の変らぬうちに固めの盃」

「ヲ、それ、孫も大方心せき、操は九献の用意しや。十次郎が初陣の、鎧の役はすぐに花嫁」

三国一の悲しみと、知らぬ白齒の孫嫁が、手を引連れて三人は奥の

尼ヶ崎の段

一間へ入りにけり。残る荅の花一つ水上げかねし
風情にて、思案投げ首しおるるばかり。ようよう
涙押しとどめ、

「母様にも祖母様にも、これ今生の暇乞い。この
身の願ひ叶うたれば、思い置く事さらになし。十
八年がその間御恩は海山かえがたし。討死するは
武士の習いと思し召し分けられて、先立つ不孝は
赦してたべ。二つにはまた初菊殿、まだ祝言の盃
をせぬが互いの身の幸せ。わしが事は思い切り、
他家へ縁づきして下され。討死と聞くならば、さ
こそ嘆かん不憫や」
と、孝と恋との思いの海。隔つ一間に初菊が立ち

聞く涙転び出で、わつとばかりに泣き出だせば、
はつと驚き口に手を当て、

「ア、コレ声が高い初菊殿。さては様子を」

「アイ、残らず聞いておりました。夫の討死遊ば
すを、妻が知らないでなんとしよう。二世も三世も
女夫じゃと申しているに情けない。盃せぬが幸せ
とはあんまり聞こえぬ光義様。祝言さえも済まぬ
うち討死とは曲がない。わしやなんぼうでも殺し
はせぬ。思い留って給われ」
と、縋り嘆けば

「ア、コレ、こなたも武士の娘じゃないか。とこ
う言ううち時刻が延びる。その鎧櫃ここへ、ここ
へ」

「アイ、アイ」

「サ早う。時延びる程不覚のもと。聞き分けないと叱られて、

「いとしい夫が討死の門出の物具つけるのが、どう急がるものぞいの」

と泣く泣く取り出す緋緘の鎧の袖に降りかかる
雨か涙の母親は、白木に土器白髪の婆。長柄の銚子蝶花形、門出を祝う熨斗昆布。結ぶは親と小手臍当。六具かたむる三々九度。この世の縁や割小ざね、猪首に着なす鍬形のあたり眩ゆきいでたちは、さわやかなりしその骨柄。

「おお、あっぱれ武者ぶり勇ましし。高名手柄を見るような。祝言と出陣を一緒の盃。サア〜早う、めでたい〜嫁御寮」

と、悦ぶ程なおいや増す名残り。『こんな殿御を

持ちながら、これが別れの盃か』と、悲しさ隠す笑い顔。

「随分お手柄高名して、せめて今宵は凱陣を」

と、後は得言わず喰いしぼる。胸は八千代の玉椿、散りて果敢なき心根を。哀れをここに吹き送る風が持て来る攻め太鼓。気を取り直し、つつ立ち上り、

「いずれもさらば」

と言ひ捨てて、思い切ったる鎧の袖、行方知らずなりにけり。

「ノウ悲しや」

と泣き入る初菊。母も操も顔見合わせ、

「祖母様」

「嫁女、可愛や、あつたら武士をむざむざ殺しに

やりました。祖母が心のせつなさを推量しや」

とばかりにて、初めて明す老母の節義。聞く初菊も母親も一度にどうと伏し転び、前後不覚に泣き叫ぶ。襖押しあけ何気のうつつか出づる以前の旅僧。

「コレく／＼かみさま、風呂の湯が沸きました。どなたぞお入りなされませ」

と言うにこなたは泣き顔隠し、

「才、それは御苦勞。さりながら年寄に新湯は毒。あとは若い女子ども。マアお先へ御出家から」

「いかさま、湯の辞儀は水とやら。左様ならば御遠慮なし、お先へ参る」

と立ち上がれば、三人は涙押包み、奥の仏間と湯殿口入るや月漏る片庇。ここに苳り取る真柴垣。

夕顔棚のこなたより現われ出でたる武智光秀。

「必定、久吉この内に忍びいるこそ究竟一。ただ一討ち」

と気は張り弓。心は矢竹藪垣の見越しの竹をひっそぎ鐘。小田の蛙の鳴く音をばとどめて『敵に悟られじ』と、差し足抜き足窺い寄る。聞こゆる物音『心得たり』と、突つ込む手練の鐘先に、『わっ』と玉ぎる女の泣き声。『合点行かず』と引き出す手負い。真柴にあらで真実の母のさつきが七転八倒。

「や、ヤ、ヤ、ヤ、こは母人か、死なしたり。残念至極」

とばかりにて、さすがの武智も仰天しただ呆然たるばかりなり。声聞きつけて駆け出る操、初菊も

ろとも走り出で、

「ノウ母様か情けない。このあり様は何事」

と縫り嘆けば、目を見開き、

「嘆くまい、く。内大臣春永という主君を害せし武智が一类。かく成り果つるは理の当然。系図正しきわが家を、逆賊非道の名を穢す、不孝者とも悪人ともたとえがたなき人非人。不義の富貴は浮べる雲。主君を討つて高名顔。たとえ將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕え、仁義忠孝の道さえ立たば、物相飯の切り米も百万石に優るぞや。おのれが心ただ一つで験しは目前これを見よ。武士の命を断つ刃も多いにこの様な引つそぎ竹の猪突き鐘。主を殺した天罰の報いは親にもこのとお

り

と、鐘の穂先に手をかけて、えぐり苦しむ氣丈の手負い。妻は涙にむせ返り、

「コレ見たまえ光秀殿。軍の門出にくれぐもお詫め申したその時に、思い止まって給らばこうした嘆きはあるまいに。知らぬ事とは言いながら、現在母御を手にかけて、殺すというのは何事ぞいの。せめて母御の御最期に『善心に立ち帰る』と、たつた一言聞かしてたべ。拝むわいの」

と手を合わし、諫めつ泣いつ一筋に夫を思う恨み泣き。操の鑑曇りなき涙に誠あらわせり。光秀は声あららげ、

「ヤア猪口才な諫言立て、無益の舌の根動かすな。遺恨を重ぬる小田春永。もちろん三代相恩の主君

でなく、わが諫めを用いずして神社仏閣を破却し、
悪逆日々に増長すれば、武門の習い、天下のため。

女童の知る事ならず。退さりおろう」

と光秀が一心変ぜぬ勇気の眼色。取りつく島もな
かりけり。折しも聞こゆる陣太鼓。耳を貫く金鼓
の響き、あわやと見やる表口。数ヶ所の手傷に血
は滝津瀬、刀を杖によるぼい／＼立ち帰つたる武
智が一子、庭先に大息つき、

「親人これにおわするや」

と、言うも苦しき断末魔。見るに驚く母親より娘
は側に走り寄り、

「ノウいたわしや十次郎様。祖母様といいお前ま
でこのあり様は情けない。お心確かに持ってたべ、
やいの／＼」

と取り付いて介抱如才なくばかり。光秀わざと声
あららげ、

「ヤア不覚なり十次郎。仔細はなんと、様子はい
かに。つぶさに語れ」

と呼ばれば、『はっ』と心を取直し、

「親人の指図に任せ手勢すぐって三千余騎、浜手
の方に陣所を固め、今や帰国と相待つところに、
敵はそれとも白浪の艦を押し切つて陸路に漕ぎ付
け、追い／＼都へ馳せ上る、真柴の軍勢ござんな
れと、関をつくつて味方の軍兵縦横無尽に薙立つ
れば、不意を打たれて敵は敗亡、うろたえ騒ぐを
追つ立て、追つ詰め、ここを先途と戦ううち後の
方より大音声。『真柴筑前守久吉の家臣加藤正清
これにあり。逆賊武智がこわっぱども、目に物見

せてくれんず』と、言うより早く太刀抜きかざし、四角八面に切り立てられ、またたく間に味方の軍卒残らず討死仕り、無念ながらもただ一騎立ち帰って候」

と、息継ぎあえず物語れば、光秀怒りの髪逆立ち、「ヤアいい甲斐なき味方の奴ばら。シテ四王天田島頭は」

「さん候四王天は、目指すは久吉一人と、昨朝よりの一騎駆け。乱軍なれば生死の程も、確かにそれと承らず。親人の御身の上心にかかり候ゆえ、未練にも敵を切抜けこれまで落ち延び帰りしぞや。今生のお暇乞い、今一度お顔が見たけれど、もう目が見えぬ。父上、母様、初菊殿。名残り惜しや」

と手を取って、妹背の別れ愛着の道に引かるるいじらしさ。母は涙に正体なく、

「討死するも武士の習いといえど情けない。十八年の春秋を刃の中に人となり、いつ楽しみの隙もこの弓矢の道に日をゆだね、今朝の門出のその時にも『母様今日の初陣に、天晴れ高名手柄して、父上や祖母様に誉めらるるのが楽しみ』と、にと笑うたその顔がわしやや幻にちらついて、得忘れぬ」

と口説き立て、口説き立つれば初菊も、

「ほんに思へばこの身程果敢ない者が世にあるうか。とけて逢う夜のきぬぎぬも永き名残りの許婚。二世を結ぶの枕さえ交わす間ものうこの様な悲しい別れをすることはどうした罪か情ない。私

も一緒に殺してたべ。死にたいわいな」

と身を悶え、互いに手に手を取り交わし、名残涙の暇乞い。見るに目もくれ心消え、母も老母も声を上げ、『わっ』とばかりに取り乱せば、さすが勇気の光秀も親の慈悲心子ゆえの闇。輪廻の絆に締めつけられ、こたえかねて、はら〜〜、雨か涙の汐境、浪立ち騒ぐごとくなり。またも聞こゆる人馬の物音、矢叫びの声かまびすく、手に取るごとく聞こゆれば、

「ヤアヤア武智光秀しばらく待て。真柴筑前守久吉、対面せん」

と呼ばわって、三衣にかわる陣羽織。小手臍当も優美の骨柄、悠然として立ち出ずれば、光秀見るより仰天し、駆け戻ってはったと睨み、

「ヤア珍らしし真柴久吉。武智十兵衛光秀がこの世の引導渡してくれん。観念せよ」

と詰寄れば、

「ホホウせいたりな光秀。ともに天を戴かぬ亡君の弔い軍。今この所で討ち取っては義あつて勇を失う道理。諸国の武士に久吉が軍功を知らさんため、時日移さず山崎にて勝負の雌雄を決すべし。がいかに、いかに」

「ホ、ウ、さすがの久吉よく言ったり。われも惟任將軍と勅許を受けし身の本懐。ひとまず都に立ち帰り、京洛中の者どもへ、地子を赦すも母への追善。互いの運は天王山。洞ヶ峠に陣所を構えただ一戦に駆け崩さん。首を洗って観念せよ」

「ホ、ホ、ホ、ホ、なにさ、なにさ。たとえ項羽

が勇あるとも、われまた孫呉が秘術をふるい千変
万化に駆け悩まし、勝鬨上ぐるは瞬くうち」
と久吉が、詞はゆるがぬ大磐石。たちまち廻り小
栗栖の土に哀れを残すとは、知らず知られぬ敵味
方。にらみ別るる二人の勇者。二世を固めの別れ
の涙。かかれとてしも烏羽玉のその黒髪をあえな
くも、切り払うたる尼ヶ崎。菩提の種と夕顔の軒
にきらめく千成瓢箪。駒のいななき迎いの軍卒、
見渡す沖は中国より追々入り来る数万の兵船。威
風りん／＼凜然たる真柴が武名仮名書きに写す
絵本の太功記と末の世までも残しけり。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

